

スペイン革命におけるCNT (10)

ホセ・ペイラツ

今村五月 訳

第二章 共和国政府のCNT

では、スペインのその他の地方では何が起こっていたか？ マドリッドは、世界を震撼させるであろう抵抗の歴史を、血をもって綴りつつあった。北部からの情報は乏しく、幸便は皆無である。アストゥリアスについては、オヴィエド付近の坑夫の戦果以外ほとんどわからない。そこでアラゴンが舞台となる。

一〇月中旬、全員が連合の分子から成る防衛地方評議会の設立が、フラガで報告される。ここに評議会の名簿がある。

議長 ホアキン・アスカソ

司法ならびに治安 アドルフォ・バリャノ

農業 ホセ・マヴィリヤ

情報宣伝 ミゲル・ヒメネス

運輸ならびに商業 フランシスコ・ボンサン

公教育 ホセ・アルベロラ

経済・食糧 アドルフォ・アスナル
労働 ミゲル・チュエカ

最近行なわれたCNT地方大会の呼びかけで結成されたこの評議会は、中央政府の承認を得ていない。共産党はこれを地方分立主義的でファッショ的だと評する。マルクス主義者の隊列は、その支配下にある後衛で混乱をまき散らし、評議會を妨害している。アラゴン地方の農民は、解放区全体で、連合の部隊「ドゥルティ」「アスカソ」「オルチス」「イラリオ・サモラ」「若わし」「労働者の団結」「赤と黒」に援助されて、最も大胆な革命の実験を行なっている。これらの部隊は、後に、三つの有名な師団、第二五、第二六、第二八に併合される。第二七師団と第二九師団とは、たがいに相いれない二つのマルクス主義グループ、PSUCとPOUMの影響下にある。

アラゴンの統後で開始された政治闘争は、地方評議会の最初の声明を通じて表明された。

「アラゴン地方防衛評議會——一般的措置——あの多数の部隊

や党派によってなされる行為を非難する住民の苦情が、あまりに頻繁にわれわれのところへ届く。そこでわが評議会は、我々が党派の暴力と正当にも呼びうるものを阻止せざるをえなくなった。

それは、まず第一に、かつ本質的な要点として、今日、反ファシズムの兄弟から解放のための強力な支持を得ていることを誇りとしているアラゴンの農民が、彼らに抱く親愛の情を、彼らの政治家気どりのために増悪に変えてしまうことがないようにするためである。また第二に、アラゴン人のものであったもの、および他の兄弟諸地方と同じくみずからの特性と政治的気質に従って進もうとする我々の権利、これが蹂躪されることを、わが地方評議会は、大多数のアラゴン住民から託された委任の名において、許すことができない。さらに、経済面では、すべての反ファシストが遂行しつつある解放闘争で、われわれが果たすべき義務を、一瞬も忘れないからである。

数世紀を通じて示されたアラゴン人の自由の精神とたくましい個性とへの無理解は、重大な誤りを露呈した。ある政治的分派の指導者たちの側では、我々の地方で、我々の内外の敵を征服し終わった土地におけるような行動をとることを主張する。この指導者たちは、こういう誤った指導を続けて、われわれ住民の方向とは正反対の政治的社会的基準を要求している。だが、住民は全ての共存者の同意を得て、反ファシズム闘争がスペインに創出している社会改革にみあった優れた生活基準を考え出していると、我々は断言できるのだ。

人民の選挙で創られた委員会は解散され、革命に命を捧げている人民たちは武装を解かれて、銃殺と監獄と体罰によって脅かさ

も道具もない。しかも他の地方にはそれがある。だが、それを得るには金か交換物が必要で、そのいずれも持っていないために、アラゴン住民だけでなく、よりよい社会のために闘っている全スペイン人にとって、将来の見通しは暗いのだ。明日の必要を考慮させないようにする浪費が、制限つきの豊かさとともに始まり、思い、考える住民を系統的に墮落させ、浪費する者を排しようとする意志を生む。憎しみと悲しみの跡は消されていく。

そこで、我々の言うように、我々に託された諸利益が然るべき力で保護されるよう監視しながら、各部隊長に次のことを達成するよう警告し、希望する。

1、生活必需品、家畜、道具類、その他のすべての請求は、この評議会に直接行なうこと。評議会は地方財産で合理的に処理するであろう。従って、この点に関しては、誰によって請求されようとも、この評議会の尊厳が全ての者に要求する当然の手續きを、不可能ならしめるような緊急の場合を除いては、特例は精力的に不許可とする。

2、反ファシズム戦線は、本質的かつ固有の人間性によって自由である人民の、政治社会的生活に干渉すべきではなく、また干渉することもできない。

また、人民とその委員会とが従うべきもの、従うべき方向を教えるために、次のことを定める。

一、当評議会の然るべき部の事前の許可がなければ、人民の間に存在するいかなる武器も引渡されないであろう。また、評議会がいずれ委員会の新しい機構を整理して設立するまでは、現在の諸委員会を解体することは許されないであろう。

れている。そして当然のことながら、新設された委員会は、違反者に関する政治綱領の作成を要求し、命令に背く者はみな、その属する武装隊が彼に課す罰を受けるべきだという主張も通用している。あれほど多くの軍靴と軍人が蹂躪してきた自由を求めて、一人民が開始した巨大な闘争に、光を与えた、偉大で高貴で友愛に満ちた希望を、恐怖が消し去る。そうやって、革命の継続を断ち、独裁を切望する一派に奉仕する反革命を創り出す。

この政令の公布を我々にせきたてる問題の他の一面は、以上に略述したことと同じく極めて重大で経験を超えるものである。間違いじみたやり方で、全く無統制に、食糧や家畜やその他のあらゆる物の徴発が、この地方全体で行なわれている。これは、あまりに愚かな方法で行なわれるなら、全面的かつ長期間の破壊をもたらすであろう。

これらの部隊みずから、これを肯定する最良の証拠であるが、遂行されている苛酷な戦いの維持に必要な全ての物を民兵が得ることに対しては、アラゴンの農民と一般住民の中で、何者もいかなる反対にも会いはしなかった。依頼も強制もなく、民兵に必要な物は、個人的にも集団的にも我々の貯えの中から自発的に提供された。革命の勝利の確実で早からんことを願うアラゴンの熱烈な希望が全体に示されているこの事実に対して、解放部隊の兄弟である住民を待遇するのに、住民の最小限度の必要すら一切無視して行なわれている現在の徴発の、この厳しさをもって、今後物品の徴発が前線や銃後で続行されるということを、我々は軍法といえども許すことはできない。

アラゴンは、今、播種しなければならぬのに、その種子も肥料

二、支配下の住民に対する手段としては、評議会の当該の部の証明書を有しないいかなる生産物、家畜、物品の徴発も許されないであろう。極めて緊急の場合は、部隊の当該の長の責任と署名と捺印の下に許可されるであろう。

三、これらの措置に違反する場合は、ただちに地方防衛評議会に告発され、責任者が明らかにされるであろう。

我々は、例外なく全ての者が指示されたことを遂行するよう希望する。それによって、解放と解放者とを憎む自由な人民という矛盾した悲しむべき事態を避けるのである。長い間憧れつづけてきた革命によって完全に荒廃してしまった人民ほど悲しむべきものはないのだ。——アラゴン地方防衛評議会代表、議長ホアキン・アスカソ——フラガ、一九三六年一〇月」

一月の上旬（アラゴン評議会のその後の進展を記録しておくため、ここでは時間的順序を犠牲にする）、ホアキン・アスカソは中央政府に次の文書を手渡すためにマドリッドに赴いた。

「アラゴン防衛評議会——設立の動機——アラゴン地方の見舞われている異常な情況は、国土のこの部分の社会的・経済的・政治的生活を統制する組織を設立する緊急の必要を感じさせた。

民政府、地方議会およびアラゴン三地区の活動の指導機関のすべてが不在であること、望ましくかつ必要な軍規の統制に全員が服してはいない部隊によるこの地方の一部の占領は、この土地の経済的崩壊と住民の困窮、それに伴う銃後の退廃を生む恐れのある混乱状態のもととなった。その結果、まず第一に、時機を逃さず、以前に活動していた諸機関の消滅によって遺棄されたすべての公的活動を継承する組織、現在の実情に適した機構と機能をも

つ組織を創設しなければならない。この組織の設立は、今日ファシズムに対して戦っているアラゴンの自由な住民と組合、政党全勢力の全面的同意を得ている。当評議会は、前述の社会的政治的ために共和国政府の保証を望み、それがために、この文書においてその意図と目的とを説明するものである。

まず第一に、当評議会は、現在の戦争と将来の再建事業における共同の努力に関して表明された社会意識をもって生まれる。従って、全幅の熱意をもって、共和国政府との絶対の同一性と、そこから発せられるすべての命令を遂行するという固い意図とを明らかにしなければならない。

防衛評議会の構成は、人民戦線のすべての政党と組合組織の間の合意によって構想された。議長一名と、目的のために必要とされるだけの数の委員、ならびに共和国政府の代表一名とからなっている。

委員は、当地方で政党と組合組織とが有する実員数に比例して指名されるだろう。

評議会は次の指導権を有する。

1、民政府と地方議会に該当する活動と権能。

2、中央政府から委任された活動と権能。

3、与えられた使命を遂行するために、当地方の現在の異常事態が要求する活動と権能。

具体的に、評議会は次の目的をもつ。

1、公安を維持する目的。あらゆる手段をもって、特に無責任なグループによって行なわれてきた横暴と独断を禁止する。

2、解放区全体における工業と農業の経済的再建をめざすこと。

3、あらゆる手段をもって、スペイン人民の自由のために戦っている諸勢力のより一層の成果のために、軍事指揮権を補佐する。

この最後の目的のために、アラゴン戦線の参謀本部に評議会の代表一名が任命されるであろう。

公安に十分留意するために、当組織は、その配下に、前線で必要な時に使用される以外は常時秩序維持の保証となるべき特別隊を配属するための手段を、もつべきであろう。

アラゴン地方でひとたび事態が正常化されれば、今日我々が代行しているが、人民の所有するべき社会的政治的将来と、同じく我々の役割とは、人民投票に付されることが、我々の確固たる意図である。

上述の意図をもって、かつ共和国政府への最大の敬意を表し、アラゴン人民の熱意を代弁して、当評議会は、他の兄弟諸地方の公的代表との緊密な連帯の下に、ファシズムに対し、社会正義と自由のために戦うであろう。

マドリッド——一九三六年一〇月——アラゴン防衛評議会に代表される反ファシズム諸勢力、代表、議長」

長い手続きに付された評議会の公式の承認は、十二月一七日になつたが、基礎の拡張を条件にして認可された。ここに最終的な構成を示す。

議長 ホアキン・アスカソ (CNT)

情報宣伝 エヴァリスト・ヴィニャレス (同右)

公安 アドルフォ・バリャノ (同右)

農業 アドルファ・アルナル (同右)

労働 ミゲル・チュエカ (同右)

運輸通信 ルイス・モントリウ (同右)

経済食糧 エヴェリオ・マルチネス (同右)

司法 イグナシオ・マンテコン (共和左派)

財務 ヘスス・グラシア (同右)

文化 マヌエル・ラトルテ (UGT)

公共事業 ホセ・ルイス・ボラオ (同右)

保健社会厚生 ホセ・ドゥケ (共産党)

商工業 クストリオ・ペニャチャ (同右)

総務 ベニト・パボン (サンディカリスト党)

当時の新聞が、アストゥリアスのある地方評議会の実情を報道しているが、その構成は次のようになっている。

軍事・商業 社会党

工業・厚生 CNT

労働 FAI

保健 自由主義青年

財務・司法 統一社会主義青年

公共事業・宣伝 共和左派

農業・土木 共産党

通信・海運 統一共和党

一〇月二日、コルテスに登院して行なわれた新政府の親任式で、ヴァスコ国憲法が承認された。

「アラヴァ、ギブスコア、ナバラは敵の支配下にあり、敵の軍

隊はヴィスカヤ沿岸を脅かしていたが、一九三六年一〇月七日、政治の旧都ゲルニカに会合した人民戦線代表は、私をヴァスコ諸州の大統領に任命した。ヨーロッパ最古の住民は、その日から、信仰と希望を青年が持ち続けるかぎり、民族が老いることはない」と証明すべく、三十二才の大統領をもつことになった。」(「アギーレ」ベルリン経由、ゲルニカからニューヨークへ)

ヴァスコ政府の責任ある地位には、アギーレとともに中道派のナシヨナリスト五名、左派一名、社会党一名、共産党一名、左派共和

党代表一名が参加していた。ヴァスコ閣僚に加わるためのCNTの

たえまない要求はかえりみられもしなかった。

一〇月二二日、バルセロナ市評議会が再建された。CNT代表部

には、ベレス・コンピナ、アントニオ・ムニョス、ハイメ・アラゴ

ファン・プイグ・エリアス、ヴィセンテ・ヴァリンエンドス、J・

R・マグリニャ、マヒン・カブルハ、ボンシアノ・アロンソ、アレ

ハンドロ・ヒラベルトの各閣士が参加した。二日の新聞は、アリカ

ンテ市評議会の評議員に七名のCNT組合員が参加したことを報じ

ていた。

二五日、カタルニャのCNTとUGTならびにFAIとPSUCの間の統一行動協定の原則が公表された。ここに協定の原則を引用する。

「ここに署名する諸組織によって結ばれた即時共同行動が基礎とするべき協定。

1、我々は、ヘネラリダッド評議会の合意と決定の実行を容易ならしめるために、我々の全勢力と組織的機能を提供して、それらの合意と決定を遂行する正式の契約を結ぶ。

応じて、生産を編成しなければならない。

6、海外貿易の重要性を考慮して、我々は、厳密な統制を及ぼすべきであり、それはカタルニャ・ヘネラリダットの支配機関によってなされるべきであると考え。

7、土地は自治体に属するが、我々は、耕作を共同で行なう意志のない個人の耕作を保証する。生産物の販売、交換、購入活動は農業労働組合を通じて行なわれるであろう。

8、我々は、小商業の滅亡をきたさないかぎり、集産体の制度に共同組合を採用することに賛成するものである。分配機構が完全でないかぎり、経済的に有害であるかもしれないからである。

9、我々は、銀行の国有化と、職員の委員会で支持されて現在ヘネラリダット評議会が行なっている銀行取引における労働者管理とに、賛成するものである。

10、我々は、小工業への圧迫にならないかぎり、個人企業の労働者管理に同意している。

11、我々は、ヘネラリダット評議会の全財政・監査政策は、戦争に勝つという根本的目的に絶対的に従うべきだと考える。

12、新統一学校の指導のもとに、多様なあらゆる分野の人民文化を向上させること。

13、我々は、我々の代表する全組織がスペイン政府に関与する場合、それとの政治的・経済的・軍事的協力の原則の制定に賛成するものである。

14、我々は、あらゆる種類の強制を廃絶するために、結社と共同行動の自由に賛成するものである。

2、我々は、生産手段の集産化、すなわち、資本家からの無償の接収とその財産の集産体への引き渡しに賛成するものである。我々は戦争のために必要なあらゆるものの集産化に賛成するものである。我々は、集産体の誠実な代表機関によって指導され統制されなければ、この集産化が望ましい成果をあげることではできないと考える。そして、その代表機関とは、この場合、ヘネラリダット評議会に他ならず、ここには全ての社会勢力が代表されているのである。小工業に関しては、ファシスト分子のもの、および戦争に不可欠の必要の場合以外は、我々は集産化に賛成しない。戦争の必要によって小工業が集産化されるような場合には、被収用者は、集産化された部門への人的専門的貢献を通して、生活上の必要を保障されるような方法で補償されるであろう。

3、我々は、住宅の全面的な自治体有化と、都市所有の小土地の自治体有化について同意している。自治体は、自治体有化を免除される最高収入額の決定を委任されている。

4、我々は、戦争の最大の勝利的な終結に貢献するために、最大の努力を集中することに同意しており、そのために、全戦闘部隊の行動、偉大な人民軍となった義務制民軍の創設、軍規の強化などを指導する唯一の司令部をもち、これら全てを、戦争の必要を満たすべき一大工業を可及的大規模に創設することによって完成させる。この工業の構造はCNTとUGTの労働者諸組織および財務・経済・防衛各評議会の同意により定められるであろう。

5、我々は、現在の戦時情勢によって決定される消費の必要に

15、我々は、無理解あるいは悪意によって、この計画の実現を危険に陥しいる無統制なグループの愚行を廃絶するための共同行動に賛成している。

以上。バルセロナにて署名。一九三六年一〇月二二日、UGT地方委員会代表アントニオ・セセ、ラファエル・ヴィディエリヤ、PSUC代表フェリペ・ガルシア、CNT地方委員会代表マヌエル・エスコルサ、ディオニシオ・エロレス、FAI代表ペドロ・エレラ」

この会合での協定を説明するために、二七日に記念闘牛場で大集会が開かれた。そこでアントニオ・セセ、フェデリカ・モントセニイ、ファン・コモレラ、M・R・ヴァスケスが演説した。ソヴィエト総領事アントーノフ・オフセーエンコが大衆に簡単な挨拶をした。

数日後、「工業と商業の集産化ならびに個人企業の統制」令が発せられた。これについては他の場所に譲ろう。

間もなくも上がる政治的事件の前に、一〇月二三日にCNT-FAI放送のマイクからファン・ペイローが行なった演説の中心部分を引用する。この老いたる闘士の言葉は、連合とアナキスト運動が開始した政治革命の明白な印を示している。

「……おびただしい血の奔流を呼ぶ内戦が行なわれる時、そして、解放の契約に満たされた社会革命が創出される時、そしてまた、ついに我々が、我々のすべてを辱しめ、それゆえ思い出すことさといわしい過去からイベリア人を救出する時が来た時、人民が戦争と革命で勝ちとる勝利は、ただ一個の政治的組合的分派によるものではなく、この恐るべき動乱を、汚辱の過去からあが

ない出す新しいヨルダン川と思い、スペインにおいて今日かぎり、屈従する我々を未開と原始の境界に抑圧してきたすべてのものを打倒するために、団結して武器をとった全人民によるものである。このことを忘れる者がいるなら、悲しくもまた痛ましいかぎりである。

真実を語る友よ、私は今こそ強調したい。最も大胆な世界的改善を意味する具体的な経済・社会的体制の樹立について我々に語る者は、我々の友であり、その善意は何者にも疑えない。しかし、彼らは、資本主義体制は場所を問わず国際的分派を有しており、戦争における我々の勝利は外国から我々のもとにくる熱意と同情と援助によって、ということをして忘れていた友である。また、これらの友は、イベリア人民が他の諸国と一体をなすものとして体質的、心理的なモザイクを作っているが、その思考は、いかに等閑視しようとも、倫理的・道徳的・経済的理論に見出せるような独自の根、精神的相違をもつ人民であることを忘れていた。

一九三一年、共和党と社会党はその瞬間が必要とした革命の道を見出すことができなかった。そして今日、それを見出すことは困難である。なぜなら、革命と戦争の鼓動が、経済・社会的改革の回路に入るための政治的改変の時を過ぎ去ったと、宣告しているからである。

しかしながら、イベリア全土のアナキストと革命的サンディカリストの同志諸君、共和党と社会党が我々の革命の道を示すべき道徳的権威を欠いているなら、我々が、その道をつくる責任を負おうではないか。なぜなら、今やCNTとFAIは、新しい世界を統治する頭脳がそうあるべき不可欠の精神的諸価値、すなわ

ち、最高の冷静と安定と無限の寛大さとを完全に獲得したのである……。戦争の終結は暫定的体制への出口となる。他のより合理的、論理的かつ正当な道がないのだから、その出口へ出る。なぜなら、我々の正義感、その場合、補償法の正しい意義と不可分だからである。もし我々の全てが戦争の勝利に貢献するならば、我々全てが革命の成果の自分の分け前にあずかるだろう。もし、今、唯一の勝利の手段が妥協することにあるなら、妥協が何だというのだ。

イベリア全人民の兄弟よ、私にとって、戦争と革命が醸成しつつある情況に最も適する暫定的体制とは、社会主義連邦共和国である。『社会主義』という呼び方に驚かないよう、アナキストと革命的サンディカリストの同志諸君にお願いする。我々はみな社会主義者である。そう呼ばれる者であり、アナキストであり、革命的サンディカリストである。全員がそうとはかぎらないのは連合主義者であるということだ。そして、ここで興味深いことは、社会主義あるいは社会主義的共和国においては、人民がみずから治める自由を認めている連合主義の基礎条件が受け入れられるということだ。だから、我々は、連合主義の基礎条件の中に、我々の政治的経済的社会的概念の必要な実験分野、ブルジョア・デモクラシーの諸要素から自由共産主義の経済的基礎条件に至るまでが、その中に存在して試みられるための十分に広い分野を、あちこちに見出すことができる。

その暫定的体制である理由は、と私に尋ねるのか？ 諸君に言う。我々と経済的社会的概念を異にする他のプロレタリア諸流派の協力を認めるからには、共同で行なわれる作業のすえに、暴

力によって我々の綱領を彼らに強制しようとすることは、正当ではないし高貴なことでもないだろう。同様に、アナキストと革命的サンディカリストの我々は、他の者が同じやり方で我々に彼らのものを強制しようとするのを不正で卑劣だと考えるだろう。これは当然の道徳的理由である。

他方、イベリア全人民の兄弟よ、戦争が勝利に終われば、人民は私有制と資本主義の体制が存続しているのを知るだろう。なおも外国資本の多くの工業が操業を続けているだろう。そして、最も基本的な群衆心理が、それら個人利益を接収しないように、我々みんなに警告するだろう。なぜなら、たとえどんな接収であっても、スペインの公的生活における国際的干渉を決定するだろうから。資本主義勢力の武力攻撃が一度もないのは、わが国に利益を持つているからであり、我々は、わが国に利益を有するそれら外国資本の工業が多くあることをあてにしなければならぬのである……。

……アナキストと革命的サンディカリストの同志諸君、社会主義連邦共和国は自治体の完全な自由という土台の上に建設されなければならないだろう。自治体相互の関係のきずなは経済的連合主義である。そこから、もし情況が必要とするなら全自治体の合同をも含む道徳的経済的連帯の、最も広くかつ高められた型態が導かれるであろう。したがって、社会主義連邦共和国の自治体は完全に自由であり、その願望と可能性に向かってよりよく形成される社会主義の潮流を受け入れるために、その一つ一つが各々自由でなければならないだろう。もし、我々の願望に最も一致する経済社会生活、おそらく真正の自由共産主義、を生きる権利を要

求することができるなら、我々がその中では少数派であるような人民がいて、ブルジョア・デモクラシーの体制あるいは国家社会主義に支配されている、ということが、我々アナキストと革命的サンディカリストにとって何だというのだ？ もし、そんなことがある場合、我々の方式の善意が、我々のイデオロギーの影響を受けないでいた人民を征服するという望みが我々に残されるかぎり、我々にとって何だというのだ。

社会主義連邦共和国はその多様性と変化を許容する。なぜなら、その理論的内容は、人民の共存の秩序は経済関係に第一の基礎をもっており、この関係は、人間感情の気まぐれとか連帯よりも、人民をみずからの間で求めあい、相互に関係するように刺激する共同の必要に、常に基づいている、という原則から出るものだからである。そうやって、ここから、経済的社会的方式の多様性はこの関係の統一のために何らじゃま物になる危険でないと結論されるのだ。

人民の共存はまた、他の道徳的精神的交流の基礎によりかかっていることも明らかである。しかし、強調しておくが、第一の基礎は経済的関係である。これらは道徳的、科学的、芸術的、文学的な関係のあらゆる交流に優先するものであるからだ。……。

現在、何物にもまして興味深いことは、我々が相互理解という計画で互いに妥協しあえるということだ。そして、強いられただが我々スペイン・プロレタリアートが生きている、歴史的な唯一の時代によって強いられたい妥協に達することができるならば、社会主義連邦共和国は、革命の出発点として我々全員を満足させるにちがいない。

計画された集産化の作業は続けることができるだろう。一部は集産主義者の原則にも社会化の原則にも合わないので、調査され修正されなければならないまい。経済社会の上の、あるいは言い換えれば経済工業上の新しく大胆な構造の点で、必ず起きるとは誰も予測できない事は、やりすごしていいだろう。しかし、確実なこと、何にもまして優越することは、現実が要請する思いがけない衝突である。暴力によってそれを超えようとする者がいるとは、決してを誤まらせた大きな責任は彼らのものになるだろう。そして、この犯罪的戦争において、人民が血を滝と注ぐこの戦争においては、何者も、その目的がいかに高貴であれ、人民の勝利を誤まらせることはできない。不幸にもファシズムが勝利すれば、イベリアの地がどうなるか、想像するがいい。そこは世界の墓場となる。反乱軍の勝利は、今まさに尊厳を持つようになったこのスペインにとって、おそらく一世紀の後退を意味するであろう。

我々の歴史のこの唯一無二の時の可能性の展望を、いかに欠いていようと、ある点までは当然、プロレタリア大衆がいかに無理解であろうとも、何事も何者もファシズムの勝利を容易にするような錯乱に陥ることを、私は許さない。それは恥辱、卑屈、隸従、死の同義語である。」

一月四日夜一〇時半、内閣総理大臣によって、CNTの四人の大臣の参加による新しい組閣を告げる覚書が発表された。その覚書の原文はこれである。

「現時点では、ファシズムに対して戦ういかなる勢力をも政府の枠外に残してはならず、また、情況は、全ての者によって責任が分担されること、およびそれら諸勢力が直接権力の席に参加す

ることを要求していることを考慮し、内閣総理大臣は大統領に、労働全国連合に代表権を与えることによって権力を拡大するよう助言した。共和国大統領閣下によってこの提案が受け入れられたので、内閣総理大臣はただちに内閣再編成の手續きをとった。政府の政策の方針ならびに計画に関しては、改組されても、今日まで実施されてきたものと同様であろう。政府は以下のように構成された。

総務ならびに陸軍 フランシスコ・ラルゴ・カバリエロ
国務 フリオ・アルヴァレス・デル・ヴァヨ
海軍ならびに空軍 インダレシオ・ブリエト
財務 ファン・ネグリン
公教育 ヘスス・エルナンデス
法務 ファン・ガルシア・オリヴェル
内務 アンヘル・ガラルサ
農業 ヴィセンテ・ウリベ
労働 アナスタシオ・デ・グラシア
公共事業 ファン・フスト
通信 ベルナルド・ヒネル・デ・ロス・リオス
工業 ファン・ペイロー
商業 ファン・ロペス・サンチェス
保健 フェデリカ・モントセニ・マニエ
宣伝 カルロス・エスブラ
無任所 ホセ・ヒラル
マヌエル・イルホ
ハイメ・アイガテ

けれどもなく、CNTに組織された多数の労働者によって、自由に採決された決定が守られるだろう。全てのものの上に降りかかるのが歴史的運命である。その運命を、CNTは、戦争を早期に勝ちとることに存する利益をもって国に奉仕するため、人民革命を消失させないために、受け入れる。我々は、政府においてCNTを代表するべく選ばれた同志たちは、彼らに託された義務と使命を果たすことができるという絶対の確信をもっている。彼らのうちに個人を見るべきではなく、代表している組織を見るべきである。彼らは支配者でも政治家でもなく、反ファシズムの勝利に奉仕する戦士であり革命家である。そしてその勝利は、彼らを提供する我々の援助が大きければ一層すみやかであろう。」

闘士たちの全員が同じように考えていたのだろうか？ CNTのこの新しい態度は国際アナキズムとアナルコサンディカリズムの支持を期待していたのだろうか？ それぞれの機関紙で強く抗議した少数の過激派を除けば、組織の委員会や会合、大会や集会を通じて、悲しい事実ではあるが、闘士の大部分が、戦争の悲劇的現実の直接の結果である一つの宿命論に侵されていたのである。

国際アナキズムに関して言えば、政府内アナキズムに対する期待は激しさの極みに達した。しかしながら、慎重な考慮や、人間精神と今まで生きてきた悲劇的現実とを認識して深く受けとめた友、確固として揺るがぬ確信の厳しさに同調しようとする勇気を抱いていた友の声が、欠けていたわけではない。最も断固たる、誠実に偏見のない要求の一つはセバスタン・フォールのものである。

フランスのこの偉大なアナキストは、革命の初期にスペインを訪れた。彼のいくつかの講演は大歓迎を受けた。CNTの政府への参

マドリッド、一九三六年一月四日」

実際、CNTに与えられた省は二つだった。保健に関しては常に単なる監督局と考えられていた。かくて、CNTに与えられた大臣職は単に法務と工業―商業だけだった。反対に、社会党、共産党、親共産主義者に関する修正の重要性と比較してみよ。一方では連合の大臣によって代表される少数派はその影響力について多くを期待する余地は残されていなかった。

にもかかわらず、CNTの新聞はすぐさま過度の楽観主義を露呈した。バルセロナの『ソリダリダッド・オブレラ』は一月四日号で次の論説を発表した。

「中央政府へのCNTの入閣は、わが国の歴史が繰る最も重大な事件の一つである。常に、原則としてまた信念として、CNTは反国家的であり、またあらゆる形の政府の敵であった。だが、情勢は、人間の意志によって決定されるとはいえ、ほとんど常にそれを超えて、スペイン政府とスペイン国家の性質を変貌させてきた。政府は、現時点においては、国家がもはや社会を階級に分ける機構を代表しないと同等に、国家の諸機関の調整の道具となり、労働者階級に対する弾圧の力ではなくなった。そして両者とも、CNTが参加することによって、今後一切、人民を抑圧することをやめるであろう。国家の機能は、労働者諸組織と一致して国の経済的社会的生活の進行を調整するだけに縮小されるだろう。そして政府は戦争を首尾よく運び、革命事業に全体的計画で協力すること以外に意を用いないだろう。我々の同志は、前もって行なわれる大集会における労働者大衆の、共同の、あるいは多数の意志を、政府に持参するだろう。どんな個人的見解でも気まぐ

加の協定ができたとき、彼の行なった批判や厳しい論争の最中、フオールはフランスのリバタリアンの新聞で次の立場を主張した。

「私は、スペインの我々の友人、特にガルシア・オリヴェルとフェデリカ・モントセニのことを考える。また、私は、最近のパリ会議とそこで発表されたこと、行なわれた説明、CNT・FAIの二人の代表によって提供された情報のことを考える。兩人とも、偉大な雄弁を駆使して、我々に詳細を説明し、彼らによれば、言わば力によって彼らに提供された閣僚の高位を、受け入れるという責任を彼らに負わせた諸々の事情の全体を、我々に説明した。私は最も鋭い注意をもって彼らの言うことを聞き、彼らの言った全てのことの文書による報告を『ラ・リバタリアン』の最近号で再読した。彼らの言葉の文章化は、どんなに忠実に正確であっても、彼らの議論の興奮した調子と激しい、湧き上がる誠意の印象を、読者にも続けて与えることはできない。が、しかし、原文はここにあり、これが本質なのだ。悲劇的な諸事件、劇的な情況、しばしば大衆と矛盾する行動の必要が、我々の友人に、ある、自然の時点までの留保として、少しづつ、だが次第に容赦なくなる厳しさをもって、周知の地位に着き、周知の政府の地位に着き、その結果の責任をとるという義務を課したのだ、ということを理解しないのは不正かもしれない。

私は裁判官にはなるまい。どんな司法権の執行も私は恐れる。そして、私は、我々の同志ガルシア・オリヴェルとモントセニに同意し支持したCNT・FAIの友人たちに、同時にこの二人の同志に、私が有罪を宣告するなどと思わないようにお願いする。それは正当でもないし、ここにそんな余地もない、私の考え

の中にもないのだ。私の性格と人間や事物の経験とが、私を寛容に向かわせ、スタール夫人の言葉を私のものとさせた。曰く『それをすべて知ることとはそれを失うことである。』

スペインで一年前から展開されているドラマの中心におり、氣をゆるせない危険にとりかこまれ、二つの戦線——戦争のそれと革命のそれ——で戦うことを要求され、果てはその残忍な闘争と極めて苛酷で困難な戦闘と、さらには多くの逆境の中で切迫した決定をしなければならぬ必要との中に置かれていたことが十分にわかるから、私は、我々の親愛なる同志は何か誤りを犯したのだと言うのである。私は絶対に誤りを犯さないような、完全に確かな人間がいるとは思わない。だから、私は最初の石を誰にも投げつけないように注意するだろう。あるまちがいを犯したら、それだけ有罪であることの比重が増さなければならないわけではない。人間なのだ。まちがいがいから抜け出さない時にこそ有罪なのである。それは、我々がまちがいに固執する時、まちがいを認めることを逃げる時から、責任が始まるということの意味する。

さて、ピレネー山脈の彼方の我々の兄弟は、彼らを閣僚とした不実な申し出を拒絶しなかった時、私の考えによれば、重大なまちがいを——無反省に、と私は確信している——犯したのであると、友情をもって直言することを許してくれるだろう。このまちがいがその他のすべてのまちがいをひきつれてきた最初のまちがいののだ。この痛ましい誤歩（政府への入閣は、情況が彼らに要求した犠牲だと、彼らは考えたのだと信じたい）が、それに続いたすべてのまちがいの出発点だったのだ。このことは、『暫定的性質で』我々の友人が地位と役割と責任を受け入れ、次第に束縛

るものの進展は、原則に対立するもので、原則から一時的に遠ざかる必要の中で、原則への愛情と尊敬を信仰の領域にまで高め、新しい現実が帰還を可能にするやたちにもとの位置に帰るものだ、と、私に反論する者は少なくないだろう。私は反論を理解する。そしてこれが私の回答だ。

1、二つのうちの一つ——現実が原則に対立するなら、原則が誤っているということだ。その場合、我々は急いでそれを放棄しなければならない。その誤りを公に告白する誠意をもたなければならぬ。そしてそれと戦うために、それを守る時に見せたのと同じ熟意と敏捷さを見せる勇気をもたなければならない。しかも、ただちに、同じ態度でより堅固でより正しく誤りのない原則を探すことを始めなければならない。

もし、反対に、我々のイデオロギーがよりどころとし、我々の戦術が擁護している原則が、現実がどうであれその本質の全体を維持しており、昨日価値があったと同様に今日も価値があるのなら、この場合には我々はそれに忠実でなければならない。——特別な情況の中で、短時間であっても——我々の原則が我々にたどらせた進路から遠ざかることは、誤りと危険な軽率を犯すことになる。この誤りに執着することは罪惡を犯すことを意味し、その結果、徐々に、原則の一次的放棄へ、そして譲歩に譲歩を重ねて原則の決定的放棄へと導く。入閣は一度ならず我々をはるか彼方に連れ去る宿命の坂なのである。

2、カタルニャの我々の同志によって試みられた、我々の原則の堅固さを危険にさらしその正当性を弱め破壊することからははるかに遠い実験は、その実験が内包する正しい教訓を汲みとって

されていくのを知り、閣僚の地位に着いて、国家の多くの主要な歯車の一つになってしまふ者たちがやるように振舞うことを、抵抗しようもなく強要されていたと書いた時、私が最も声を大にして言いたかったことである。

一人の政治家、政治的グループに属している者が入閣することを承諾する、その野望をもっている、あるいはその榮譽と利益を求めるのは、非常に自然である。こういう人間は自分の役柄を演じ、自分の『チャンス』をつかみ、敷かれた道を急ぎ、好機を逃すまいとよく注意しているだろう。だが、アナルコサンディカリスト、アナキストが大臣職を受け入れるとなれば、事はもはや別問題だ。アナルコサンディカリストは彼らの旗に大書した、『国家に死を』と。アナキストは彼らの旗に燃え上る文字で綴った、『権威に死を』と。双方とも明確な原則に基づいた明確な計画で結ばれている。何事も何者もこれらの原則に執着することを彼らに強制はしない。完全な独立と公平な事実認識をもち、熟慮しつつ、これらの原則は承認され、この計画は支持され、宣伝され、守られてきた。

であるから、アナルコサンディカリストは国家の車を引く使命をもつあんな者たちに加わることはできない、という考えを私は支持する。なぜなら、この車、この『有名な車』は、決定的に破壊されるべきだと確信しているからだ。私は言う。アナキストはあらゆる権威の執行を拒絶する義務がある、なぜなら、すべての権威は破壊されるべきだと、彼は全く確信しているのだから。

そんな風に考えるのは、私が原則ばかりを問題にしているからで、多くの場合、事件や情況や出来事、すなわち現実と総称され

活用し、我々の原則とその力の正確さを威嚇することができるなら、いい成果をあげることができるし、またそうでなくてはならない。CNTとFAIはスペインでいまだ強力である。いまだ相対の威光と、都市と農村のプロレタリアートに及ぼす影響力とを享受しているし、その力は、当然のことながら議論の余地があるまい。

スペインと外国の我々の友人は、私の言う入閣の実験がその力、その威光、その影響力を強化したと信じるだろうか？あるいは反対に、その威光と力が弱められたと判断するだろうか？公平であるために、これらの事件の枠内に入らないことはすべて除外しよう。可能なかぎり、専ら対象だけをこととしよう。目を見開いて、その他の配慮をみな無視して、現実以外は参考にならないようにしよう。私としては（そして私は、人が私にそう言ったから、私の快活な状態に関与するものが沢山あることを知っているが）、CNTとFAIは入閣の実験によって何も得なかったと言わざるをえない。また、反対に多くを失ったと私は考える。我々は決して出しゃばらないようにしよう。変節とか裏切りとか言わないようにしよう。それを問題にするのではなく、我々が実際的な結果を学ぶ戦術と事実とを問題にしよう。したがって確証の道をとろう。

まず第一に、もし、中央権力への実際の参加がFAIに加盟する組合と団体の内部で多数の賛成派を得たのであるなら、この決定が多少とも重要な少数派の反対に多くの点で遭遇したことは疑いない。なぜなら、満場一致ではなかったからだ。これらの組織の各々に存在していた内部的団結は破られていないし、分裂もな

かった、しかし動揺している。何年も前からCNT・FAIを結びつけていた緊密な絆は破られなかった、しかし弛緩が生じた。二つの分派が発生し、組合とアナキスト連合の大本部の物質的力と同じく精神的権威も、疑うべくもなく、この対立する二派の衝突の結果に影響された。

第二に、反対に、労働者農民大衆の代表に比べると、政府の活動に参加するよう招聘された諸政党は敏感に影響力を増大した。以前得ていた位置を強化し、さらに別の新しい位置を獲得した。そして、彼らにおなじみの改良主義的妥協主義的諸措置を正式に採用して以来、革命的階級闘争の精神と、この精神から論理的に生じる直接行動の諸手段に対抗して、次第にこれらを脅かしてきた。

第三に、CNTとFAIの連合主義者組織が労働者大衆のうちに論理的に決定し、自動的に習慣化していた思考と習慣は、彼らの最も優れた代表の、ことに集権化された中央政府内閣への入閣の結果、敏感にきずついた。

実行したばかりの行動、始めたばかりの闘争、議決して義務づけたばかりの諸決定、さらには賛成したばかりの責任の軸は、『まさにその事実によって』論理的自動的に脱線することになった。すでに衝撃は底辺から発したのではなく、頂点からだった。指導は大衆から発したのではなく、指導者たちからだった。

これらの事実は否定できないし、スペインのリバタリアン運動にとっておよそ有益ではない入閣は、あらゆる点からみて有害だと認めるに十分すぎるほど十分だと、私は考える。もう一度、例外的な、私にはわからない劇的情况の圧力の下で、心身をこめ

とアナキストによって結ばれた協定は、常にアナキストを犠牲にする偽瞞であるとは、経験によって、歴史によって、単純な理由によって、証明すみの真実である。権力者と手を取りあって進む行程では、アナキストの忠実と誠意は、その一時的でその場かぎりの同盟者の裏切りと奸悪のわなに陥る。

ということとは、象牙の塔あるいは完全な孤立を称揚することか？ 否、絶対に！ なぜか？ なぜなら、アナキズムはすでに以前から、純粹に理想家の極めて哲学的でひたすら感傷的な思索の運動ではなくなった。アナキズムは現実の大地に深い根をもつ社会的な運動である。その発展とダイナミズムは、みずからの前進とみずからの勝利を可能なかぎり遂行するために周囲にあつてみずからの発展に利用するべき偶然と、密接に結ばれている。

アナキズムの目的は明確だ。独特の柔軟性によって事件の曲がりくねった道が要求する種々様々の要求を考慮に入れることができ、またそうしなければならないその行動は広大である。

だから、決して象牙の塔ではない。決して孤立ではない。反対に、ためらいと深慮とは、何者と手を取りあってであろうとも、厳密に我々の道ではない道に足を踏み入れる前の慎重を示すものである。

それにしても、私はCNTとFAIの我々の兄弟のためにとおいておいた賞賛と友情について述べることなくこの忠告を終わりにたくない。私の判断では、この深い賞賛、不変の善意を彼らに表白する最良の方法は、我々の疑問と我々の胸中を黙秘することではない。これまで以上に、我々は、婉曲や過言によらず、忠実と率直をもって表明するのではなく、彼らに賛成し彼らを賞賛するこ

た運動に奉仕しようと考えた友人たちの個人的な意志の経過にはふれないと、私ははっきり言っておく。私はその誠意に疑いをはさまない。だが、彼らの陥った誤りとそれに続いた結果とによって、我々のイデオロギーと我々の戦術とが基礎とする原則の揺がぬ堅固さを明らかにしたい。なおかつ、私は、全世界のアナルコサンディカリストとアナキストの注意を、この原則の善意とこれへの忠誠の必要と、いかなる状況であれこれを放棄する時に存在する実にも多くの重大な危険とへ、うながしたいのだ。最後に、そして何よりも、希望する目的への我々の前進を遅らせ挫折をきたすような誤った術策と、さらに我々の最終目的にそむくようなことから我々を救うべく定められた必要な教訓とを、先例の観察から引き出さなければならないと信じる。

アナキストはあらゆるものに対し、決然として休戦なき戦いをしてきた。勝利を得るまではあきらめずに戦い続ける覚悟である。この戦いは、一方では、いかなる犠牲を払ってもなすなければならないものを、他方では、いかなる状況の下であれなすべからざるものを、もたらす。なすべきことをなすことが必ず常に可能なわけでないことを、私も知らなくてはならない。だが、絶対になすべきでないことがあることも、私は知っている。

スペインの経験は教訓を与えることができるし、またそうなければならぬ。この経験は、特殊な状況の下であっても、一定時間内であっても、譲歩することと同盟することの危険に対して、我々を警戒させる。譲歩はすべてそうする者を弱くしそうさせる者を強くするということは、即ち、議論の余地なき真実である。一時的にもせよ、理論的にも実践的にも反アナキストである政党

とによって、我々の友情を表明するであろう。これはまた、私のしたことである。他の方法ではできなかった。我々の友人がした驚くべき努力と、大胆な指導性とエネルギーで忍耐強い活動とのおかげで実現した奇跡を、私は忘れられようか？ 有名無名をとわず、革命と自由の名の下にイベリアの地に倒れていった英雄的な闘士たちを、私は忘れられようか？ 彼らを犠牲にした冷酷な攻撃や不名誉な告発や無数の名も知れぬ迫害を、私は忘れられようか？ 国際リバタリアン運動が彼らに負うてるところのものを、私は忘れられようか？

同志諸君、我々は、CNTとFAIが我々に示したこれら大胆な指導性と圧倒的な危険と勇敢な活動と英雄的な闘争の、驚くべき模範を忘れはしない。二カ月前から我々の自由のために彼らが戦っていることを忘れはしない。我々は彼らを愛しよう。彼らの側に留まろう。そして、彼らが、この類例のない時にあって、我の熱い善意によって支持され、援助され、庇護され、激励されていると感じられることを祈る。」

第三章 政治と革命

一日は内戦の最も英雄的な一時期を記録する。全戦闘力をスペインの首都の周辺に集中した敵は、防衛線を突破しようとする最大の努力をする。政府の首都退却に対して、マドリッド市民は「政府なきマドリッド万才！」と叫び、愛する町の防衛を準備する。マドリッド占領は、ファシストにとって軍事的外交的な勝利、心理的影響の大きい勝利を意味する。防衛側からみれば、これ以上に微妙な情況

はありえない。武器と有効な作戦計画の不足とを、勇氣と、実際に生命を投げ出すことで補っているという有様だ。ちょうどこうした時、ドゥルティが彼の民兵部隊を率いてマドリッドに到着。到着するとすぐに、とれる休息もとらずに、参謀本部の督促で、モンクロアとパルケ・デル・オエステの基地にいるムーア人部隊に脅かされている各部署を占領するために動く。圧倒的に絶望となっていた戦闘は、一日から二日までもちこたえる。その日、この英雄と彼に同行していた勇者たちの大部分の命が消えるのだ。

一七日、ドゥルティは最後のものとなる言葉をしたためている。「私は、単にスペインのプロレタリアートにとつてのみならず、全世界にとつて、今日生死の問題である戦闘に勝つために、アラゴンの山からやってきた。すべてがマドリッドに結集された。そして私は、せめて戦闘にいつその花を添えんがために、敵と相まみえたいのだということを、君にはかくさない。カタルニャを奪つ前に、私は同じことに魅かれていた者たちに自覚を乞うた。武器や燃料の不足のことではない。最後の一撃のために全力を注いでいる者たちのことだ。もし撃つことに意志と計算がなければ銃は無役だ。マドリッドにファシストの侵入する恐れはない。だが奴らをすみやかに追い払わなければならない。再びスペインを得なければならぬからだ。マドリッドでは満足していると、私はかくさず君に言う。今、私は、自分の責任を知っている。勇氣ある人間の冷静をもって、嵐に脅える時の人間の卑小さをもつてではなく、真にそうなるのを見たいと思っている。」

二〇日の夕方、ドゥルティは大学街の彼の部署の戦線を偵察に行つた。前線の近く、敵の陣地に包囲されている地区で、彼を乗せた

車は数人の民兵とすれちがった。彼は車を止めるよう命令し、彼らが戦線を捨てたらしかったので、尋問しようとして車から出た。そうこうしているうちにおびたらしい銃声が聞こえた。そしてドゥルティが自動車にひき返す時、自動車から数メートルと離れていない所で、声もあげずに倒れた。カタルニャ民兵の野戦病院に運ばれたが、致命傷のため間もなく死亡した。一発の弾が胸を貫き、心臓を鮮血で染めていた。

この知らせは前線全体と反ファシズム・スペイン全体とに深い動揺を引き起こした。死体は貨車でバルセロナへ送還されたが、それは皆の嘆きの示威行進であった。カタルニャ州都への埋葬は、人民の示威行進の歴史に唯一のできごと、カタルニャ住民の最も多く参列した、自発的な、そして悲しまれたできごととなった。

初めのうちは、ありそうながみがみ取り沙汰された。大衆的革命的影響力をもつ人間像の一つをドゥルティから消し去ろうとする諸派諸党の、巧妙な意図からでた激しい敵対が生じた。伝説的な挿話に満ちたドゥルティの生涯は、すでに運動の始まる以前から著作家や伝記作家の筆を動かさせていた。革命と戦争を通じての彼の美談は彼の姿を大きくし、勇氣の不滅の輝きによつてその姿に光輪を加えた。人民らしい感傷は、彼の死と同時に生じた情況の与える混乱した仮定、暗殺、を信じこませた。ファシスト派のラジオは、混乱と士氣の喪失という、理解に難くない目的のためにこれを利用した。マキアベリ流の謀略によつて行なわれたことの真実性を消すために、CNTとFAIの委員会は二日次のような覚書を發表した。

「労働者諸君！『第五列』と呼んで知られる伏兵たちは、我々

の同志ドゥルティが、不実にも裏切り行為によつて暗殺されたという、偽りの卑しいいざん説を流した。この不名誉な中傷に対し、すべての同志は警戒の位置につくこと。ファシズムに対する最も有効な武器、プロレタリアートの行動と思考の固い団結、これを崩そうとねらう卑しい手段がめくらされている。同志たち！ドゥルティは裏切りの犠牲などでは決してない。彼は他の多くの自由の戦士と同じく、戦いで倒れたのだ。英雄の倒れる如く、義務を果たして倒れたのだ。諸君、我々の無敵の団結を破るためにファシストがばらまいた悪辣ないざん説を撃退せよ。すべて断固として撃退せよ。兄弟殺しの噂をまいた無責任な者たちに耳を貸すな。それは革命にとつて大きな不幸である！——CNT全国委員会——FAI半島委員会」

ドゥルティの荷物が開かれて、所持品が点検された。着換え一枚、ピストル一対、双眼鏡、サングラスだった。

かくてマドリッドは英雄たちの血と命によつて最も危機的な瞬間を救われた。狂言的な、あるいは欲得ずくの俗物集団に伴われ、最新式の戦闘力をもった反乱軍の最も悪名高い將軍たちは、計画と希望を粉砕された。ファシスト側スペインの各地は、さぞかし待ち焦がれ、しかも終戦までは実現しないだろうことのために、音楽と楽隊を用意したまま、飾りつけを了えたままで、さらに何カ月も何年も待つのである。

一二月二日、次のものから成るマドリッド防衛代表評議会が組織された。

議長 ミアハ將軍
書記 マクシモ・デ・ディオス（社会党）

公安 サンティアゴ・カリリョ（JSU、共産党）
撤退 エンリケ・ヒメネス（統一共和党）
食糧 パブロ・ヤグエ（UGT、共産党）
民兵代表 ディエゲス（共産党）
運輸 アモル・ヌニョ（CNT）
宣伝出版 カレニョ・エスパンニャ（左派共和党）
工業・軍事 エンリケ・ガルシア（JLEL）
公共事業 カミネロ（サンディカリスト党）
同月一二日、新聞は次のような覚え書を發表した。
「民兵司令部と同司令部の人民戦線代表部は、防衛評議会の民兵代表部と協議のうえ、民兵の軍隊化に関する政府の命令を考慮して、我々の戦争の利益のためには、正規軍の創設と、この目的のため、異なる組織の民兵グループや戦闘部隊を完全に統合してすべてを部隊と旅団に編入することが、不可欠の必要である、と判断した。

そのため、不完全な部隊として、あるいは他の部隊の残留者として現在マドリッドにあり、各兵營にある兵力はすべて、民兵司令部により、完全な統合体に再編成されるであろう。これらは給与と配給が有効と認められる唯一のものであり、この条件で入隊することに抵抗する者は、給与の受領と身分とを剝奪されるであろう。——コスモス」

一方、二四日にはマドリッドでミアハ將軍が次の布告を出した。
「マドリッド防衛代表評議会議長、マドリッド防衛軍総司令官ホセ・ミアハは布告する。

一、後衛民軍の編成が完成するまで、首都の道路と首都内にい

る全駐留部隊と監視部隊は、一五時間後に撤退するであろう。これらの部隊が行ってきた任務は、その時刻より治安ならびに攻撃部隊の任務となる。

二、民軍総司令部は、上部から与えられる命令と参謀本部から受ける指示に従って、後衛の民軍を部隊に編成する仕事をするであろう。

三、銃器を携行して住宅地区内を歩くことは絶対に禁止する。それは正規軍部隊とそれに編入されている戦闘部隊の責任者の命令による場合だけ認める。

四、防衛軍参謀本部と治安総司令部から特に許可されているもの以外、建物と宿营地の連絡と保護のための駐留、ならびに監視部隊は編成されないだろう。公的任務にあらず、守備と監視の活動を行なっているその他の武装グループは、反乱者とみなされ、軍事裁判法の然るべき制裁にかけられるであろう。

五、公安秩序に関するすべてのことは、治安警察により、その委任する組織を通して取り扱われるだろう。これらの組織はこの布告の実施を監視する任務を負うであろう。

六、犯された違反は、司法当局により即決裁判として裁かれるであろう。」

二日後、マドリッドの一区域で衝突が起きた。その結果、防衛評議会の食糧庁代表が重傷を負った。社会党、共産党、親共産主義者の機関紙はCNTに激しい批難を浴びせて、この事件の直接の原因をCNTのせいにした。連合の多数の分子が即決裁判委員会に送られた。被告の弁護に乗り出した日刊紙「CNT」は発行を停止された。CNT首都地方委員会は次の言葉で事件に関する見解を明らかにした。

「我々にははっきり答える。同志ヤグエが負傷した後、抑えがたい熱狂の炎を燃やす者たちによって、マドリッドの路上で我々の組織の同志が暗殺されるというようなことは、二度と許さないであろう。最近、CNTの三人の同志が首都の舗道の上で死体となって発見された……」

即決裁判では、それによって裁定の下される二〇余の質問に対する回答は、被告たちの無罪を示していた。それを見て裁判官は告訴を却下した。

レヴァンテについてみると、一〇月中旬に重大な事件が起きていた。テルエル前線にある連合の守備隊が、革命の利益を危険にする寄生勢力を一掃する目的で後衛地へ進入したのだ。連合の分子とアナキストを主力とする「鉄の部隊」は首都を強襲し、後衛部隊と血の衝突を演じた。事態が回復した後、共産党と政府の各機関紙の中傷キャンペーンに対して、前述の部隊は次の声明を発表した。

「FAIとCNTの分子、ならびにいずれの組織にも属さず、ヴァレンシアで活動した諸分派に対して、またある分派が当部隊について行なっている論評に対して、アナキストの思想と手段に同調するその他の者からなる『鉄の部隊』は、我々を犠牲にして党派活動を行なおうとする者がなく、我々の行動を広く宣伝する最大の必要を感じている。」

『鉄の部隊』という共通の名の下に、このとおりアナキストとして、テルエル前線で僧侶と軍人の反動に対して戦っている我々は、前線の諸問題と同時に銃後の諸問題についても配慮している。したがって、ヴァレンシアでは事が我々の望んでいた道を進んでいないのを見た時、銃後が我々にとって保証となるどころか

にした。

「同志ヤグエが犠牲になった事件は次のようにして起きた。同志ヤグエは、防衛評議会が彼に託した補給の任をおびて、マドリッドを出発した。アラゴン街道でアテネオ・リベルタリオの丘に着いた時、乗用車は同本部のある地方警備隊の隊員たちによって止められた。部隊の一人が、この任務には当然の規則で、彼に証明書の提示を求めた。そこで同志ヤグエはその男に防衛評議会の代表であると答えた。我々の友人は、代表であると言うだけでは十分じゃない、自分はそこを知らないし、マドリッドを不在にするには必ず携行しなければならない証明書を提示しなければならないと言った。そこで同志ヤグエは赤い身分証明書を見せた。だが、それを調べるよう警備隊の責任者に手渡そうとはしなかった。我々の友人は、彼に、これもまた十分ではない、彼が持っているのは、この種の証明書を査証する権力のある唯一の機関たる主務官庁の事前の通達がなければマドリッドを離れることができない種類の身分証明書だと教えた。するとヤグエは威圧的な態度で、自分はこの議論でこうして止められることに同意できないと答えて、運転手にかまわず行くよう命じた。警備隊の同志たちの決定で、一発の弾がこの通行者たちを威嚇して乗用車を止めさせるために空に向かって発射された。だが車は止まるどころか加速した。その時、他の同志たちがその車に二発打った。そして不幸にもその一つが同志ヤグエを負傷させた……」

声明は次の警告で終わっていた。

「我々はすべての反ファシストとの友好の絆を、誠意をもって強める用意がある。しかし我々を巻き込もうとする暴力的状況に對

危険の種になっていると認めた時、我々が介入することを決定し、その目的のために関係諸組織へ次の請願書を送った。

一、治安警備隊の全面的武装解除と解体。

二、国家に奉仕する全武装部隊の前線への即時派遣（突撃隊、国境警備隊、治安部隊、その他）。

三、資本金と国家のすべての機関の記録とブラックリストを破壊すること。

我々はこの請願を二つ、すなわち革命とイデオロギーの観点から送ったのだ。アナキストとして、革命家として、我々は治安警備隊の存在は危険だと考えていた。それは純粹に反動的な部隊で、歴史を通じて、特にこの運動の間はその精神とやり方を明白に現わしたのである。

治安警備隊は我々にとってはおぞましく見たくもなかった。なぜなら我々はあらゆる理由からそれを信用していなかったからだ。だから我々はその武装解除を要求し、だから我々はそれを武装解除するのである。

我々は全武装部隊が前線へ行くことを要求する。なぜなら前線では人と武器が欠乏しており、市内には事態の現状が示すおと必要以上にそれらがあつて、その滞りは邪魔にさえなっている。この観点に我々は共同で到達した。そして、その完全な実現までは決して退かないであろう。

最後に我々は、我々の自由の意識が反逆する専制と抑圧の過去の象徴である全ての文書を破壊することを要求した。我々は、文書を破り、裁判所のような、かつては監獄に革命家たちを埋葬するための、そして絶対自由の社会の曙と我々が考える今日では、

いかなる存在理由もない建物を、接収しようと考えた。これらの目的が我々をヴァレンシアへ向かわせた。そしてまた、このことは我々が我々にとって最も適当と思われるやり方で実行したことなのである。

そのうえ、我々は、ヴァレンシア滞在中、正貨不足のために武器買付けの工作が失敗したというのに、多くの店舗には大量の金やその他の貴金属があるのを見た。それが我々をして数軒の宝石商から金銀白金を接収させたのであり、こうして組織に引き渡されたものは取るに足りない量であった。

以上述べた全てが我々のしたことである。では我々のやらなかったことを見てみよう。

我々は民家を略奪したと批難されている。しかしそれは嘘だ。我々は、我々の行為によって善行賞をくれたり、我々の仲間の必要よりも錯乱した気紛れや希望の方に従うという者たちを、誰も信用しない。我々はやくざのようなやり方で人を殺したと批難されている。だがこれは卑怯なことだ。この評価を正当化する何を一体我々がやったと言うのか？ 我々がどんな罪を犯したと言うのか？ 我々がまず最初に嘆き断罪した一つの不幸な事故が、批難する者たちの根拠であるようだ。同志で社会党員のホセ・パルド・アラシルの死は我々には全く無関係だ。我々の部隊の誰一人、これには加わらなかったと、事件同夜に発表されている。我々は社会党であれ他の反ファシスト諸派であれ、攻撃しようなどとは決して考えなかったし、被害者パルドがやられたようなずいやり方はなおさらのことである。これが、我々の闘争の唯一の理由である我々の目的を我々が放棄するという意味でないなら、我

我の間の闘争はこの瞬間に罪悪となる。我々の目の前には恐るべき敵がいる。我々の全力はこれを打ち破ることに向けられなければならない。

ここに陳述したことによって、我々の行為は明らかにされたものと信じる。我々は革命家である、そしてそのように振舞ってきた。実直と品位をもって。馬鹿でない者なら我々の所業に悪意と軽率を読みとることはできないだろう。

スペインの発展のためのこの決定的瞬間において、我々の立場は明白かつ確実である。我々の全同志、我々の全エネルギー、我々の全熱情をもって、我々は醜悪なファシズムを永遠に打倒するまで戦うであろう。我々は社会革命実現のために戦っている。アナ・キーに向かって前進している。それゆえ、我々は現在も将来もより一層の自由をもって生き、我々を抑圧してきたくびきを断ち切り、過去の隷従を破壊することをめざす全ての者を守るであろう。我々は全労働者、全革命家、全アナキストに告げる。前線でも銃後でも、君たちの今いる所で、君たちの自由の敵に対して戦え。ファシズムを打倒せよ。だが同時に、君たちの努力の成果から、君たちの欠陥と不道徳を抱えていて我々が消滅させようとしている全ての事の延長である独裁制が樹立されることを阻止せよ。今は武器によって後には労働の道具によって、自由への唯一の道である僭主なく生きること、君たちみずから発展することを学べ。これが『鉄の部隊』の考えであり、明確に平易に述べたことである。

同志たち、ファシズムをやっつけろ！
社会革命万才！ アナ・キー万才！

黒の手帖 総目次(号ノ十号)

第一号(一九六六年十一月)

『黒の手帖』創刊の弁
人間のなかの組織と組織のなかの人間と

『革命理論』という『錦の御旗』

十九世紀と二十世紀の革命思想

セルゲイ・ネチャーエフの貫録(上)

反権力とスペイン革命

書評『革命について』

ことば

春の一葉(上) E・ウオールピン

第二号(一九六七年四月)

合意による組織と権力による組織

現代科学と現代政治

セルゲイ・ネチャーエフの貫録(下)

書評『スペイン革命におけるCNT』

スペイン革命におけるCNT(1)

『女人芸術』誌上のアナ・ボル論争

秋山 清

春の一葉(下) E・ウオールピン

第三号(一九六七年九月)

非暴力直接行動論ノート

『記念』は反革命の足掻きである

無数のメモリアル

権力と階級

書評『革命』

ある農本主義との論争

スペイン革命におけるCNT(2)

ある仮面を剥いだ裁判のレポート

第四号(一九六八年一月)

国家―権力による組織の最高型態

(上)

トロツキーの赤軍創建と文化の運命

一条の稲妻のように

ロシア革命とアナ・ボル論争

書評『ある孤独』

分裂の歴史

スペイン革命におけるCNT(3)

第五号(一九六八年五月)

国家―権力による組織の最高型態

(中)

非暴力直接行動論

『危機的状況』における類腐

秋山 清

内村剛介

前期バクーニン研究

スペイン革命におけるCNT(4)

第六号(一九六九年一月)

避る革命的暴力

哲学に機関銃をさし向けて

直接行動論をめぐる論争(1)

陀仙辻潤素描

中国文化大革命とアナキズム

スペイン革命におけるCNT(5)

第七号(一九六九年六月)

国家―権力による組織の最高型態

(3)

原点は現在である

農民革命と現代修正主義

書評『神もなく主人もなく』磯谷武郎

直接行動論をめぐる論争(2)

石川イズムの形成とその特質

スペイン革命におけるCNT(6)

第八号(一九六九年十二月)

アナキストの文学とアナキズムの文

秋山 清

学

不可能性の軍隊

誠実ゆえの偽善は可能か

ブルードンと現代(1)

大杉栄とベルグソン(上)

国家―権力による組織の最高型態

(4)

スペイン革命におけるCNT(7)

第九号(一九七〇年六月)

俺は俺である

官尊民卑について

文学のアナ・ボル論争(1)

書評『反国家と自由の思想』蓮台寺晋

ヴィルヘルム・ライヒ論

ブルードンと現代(2)

大杉栄とベルグソン(中)

スペイン革命におけるCNT(8)

第十号(一九七〇年十月)

人間における遊戯と労働(1)

文学のアナ・ボル論争(2)

書評『虚無の霊光』

ヴィルヘルム・ライヒと難論大沢正道

大杉栄とベルグソン(下)

スペイン革命におけるCNT(9)

J・ペイラツ

秋山 清

長谷川武

内村剛介

三浦精一

大沢正道

大沢正道

J・ペイラツ

大沢正道

田木 繁

秋山 清

長谷川進

三浦精一

大沢正道

J・ペイラツ

大沢正道

野本三吉

大沢正道

三浦精一

J・ペイラツ

大沢正道

大沢正道

大沢正道

大沢正道

大沢正道

大沢正道

大沢正道

大沢正道

編集後記

前号で内村剛介「スターリン治下のアナキストたち」を予告したが、都合で「カチキズムへの回帰」に変更した。御諒承いただきたい。

カチキズムがキリスト教社会の精神形成にいかに関与したかがわっているかは、非キリスト教社会の日本では案外見落とされている。内村の論文はいわばその盲点に着目し、ロシアの革命家たちの意識下の構造の秘密にライトをあてている。

日常化されている宗教的な社会慣習が、どれほど深く個人の、また集団の精神形成にかかわっているか、われわれはそこをこのころをもう一度よく考えてみる必要がある。意識の表層は、外からの刺激に応じて、あれこれ取り換え可能だが、深層はなかなかのことは動くものではない。このことを見失う時に、安

手なオポチュニズムがきやびらかな、あるいはもつともらしい衣裳をつけて、欺きの花を咲かせるのである。現代は、その花盛りというところか。

◇

宋世何「杜鵑の声」は、『黒の手帖』で最初の創作である。宋は朝鮮の老アナキスト。戦前から在日朝鮮人アナキストとして闘った経歴の持主で、戦後、ほとんどすべての朝鮮のアナキストがナショナリストに転じていくなかで、頑固にアナキズムの精神を崩さなかった異色の人もある。

「杜鵑の声」は彼の第二作だが、淡々とした語り口に漂うところのある味合いに捨て難さを感じるのほくだけであろうか。ここには、波立つ表層を突き抜けた深層の静けさのようなものがある。

こういう作品を書ける精神の持主だったからこそ、宋は、戦後

の祖国の独立と分裂という激動に耐えて、自分を貫くことができたのではなからうか。環境のどのような変動にも耐えて、自分の内部をじっと見詰める眼、それが映す世界は、案外、きわめて平凡なものなのかもしれない。

◇

『黒の手帖』も足かけ五年で十一号に達したので、区切りをつける意味で、第一号から第十号までの総目次をつけてみた。

このように目次を並べてみるとそこにもささやかな歴史があったことが分かる。このささやかな歴史に書き手として、読み手として、あるいは作り手、売り手として参加してくれたすべての人に、ありがとうをいわせてほしい。

ただ、さんねんなのは第一―八号は在庫がなく、あたらしい読み手に渡すことができないことだ。

黒の手帖 第十一号

一九七一年五月十日発行

編集発行人・大沢正道

発行所・黒の手帖社 東京

京都新宿区北山伏町三三
(大沢方)郵便番号一六二
振替・東京一〇二四六五

印刷所・株式会社清水印刷所 東京都新宿区戸塚
町三丁目一五〇

定価・二〇〇円

送料四五円

二号分前納・四五〇円

四号分前納・九〇〇円

(いずれも送料共)